

県立琵琶湖漕艇場浚渫工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

# 大 江 湖 底 遺 跡

1 9 8 6 ・ 3

滋 賀 県 教 育 委 員 会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

県立琵琶湖漕艇場浚渫工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

# 大 江 湖 底 遺 跡

1 9 8 6 ・ 3

滋 賀 県 教 育 委 員 会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序 文

琵琶湖には全国的にも稀な湖底遺跡が存在していますが、その実態は数多くの謎に包まれています。

近年琵琶湖総合開発に伴って湖岸や湖底での埋蔵文化財の発掘調査が進められ、湖底遺跡がわずかずつ解明されてきました。

琵琶湖は古来より滋賀県民の生活や交通の中心であるばかりか、京阪神地方全体の文化の起点でした。

この文化の源泉とも言うべき琵琶湖の埋蔵文化財調査は、琵琶湖の歴史を明らかにするだけでなく、現代と未来に生きる人人の指針となるものです。本書がその一助となれば幸いです。最後に調査に御尽力いただきました各位に改めて感謝申し上げます。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長

南 光 雄

## 例 言

1. 本書は琵琶湖総合開発の県立琵琶湖漕艇場浚渫に伴う大江湖底遺跡発掘調査の概要報告書で、昭和60年度に発掘調査・整理したものである。
2. 本調査は水資源開発公団からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本事業の事務局は次の通りである。

### 滋賀県教育委員会

文化財保護課長市原浩、課長補佐中正輝彦、埋蔵文化財係  
長林博通、管理係主事山本徳樹

### (財)滋賀県文化財保護協会

理事長南光雄、事務局長江波弥太郎、埋蔵文化財課長近藤  
滋、調査一係主任兼康保明、囑託調査員濱修、総務課長山  
下弘、主事松本暢弘、立入裕子

4. 現地調査は(財)滋賀県文化財保護協会主任兼康保明・同囑託濱修を担当として実施した。本書の執筆・編集は担当者濱を中心に行った。
5. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としてB.S.L. ± 0 = 84.371mである。
6. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の協力を得た。  
西沢照平、田中幸子、藤本隆之、内田一成、今村浩之、野毛康広、
7. 出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している

# 目 次

|                     |   |
|---------------------|---|
| 序 文                 |   |
| 例 言                 |   |
| 第1章 遺跡の位置と環境        | 1 |
| 第2章 調査にいたる経過        | 2 |
| 第3章 調査の内容           | 3 |
| (1) Aトレンチ           | 3 |
| (2) Bトレンチ           | 4 |
| 第4章 出土遺物            | 5 |
| (1) 60年度発掘調査        | 5 |
| (2) 59年度試掘調査出土縄文式土器 | 5 |
| (3) 57年度試掘調査出土縄文式土器 | 6 |
| (4) まとめ             | 7 |
| 第5章 結 び             | 8 |

## 図 版 目 次

- 図版 1 Aトレンチ (上) 調査地遠景 (南東から) (下) 調査前近景  
(東から)
- 図版 2 Aトレンチ (上) 調査状況 (東から) (下) 完掘後(西から)
- 図版 3 Bトレンチ (上) 調査地遠景 (南東から) (下) 調査前近景  
(東から)
- 図版 4 Bトレンチ (上) 調査状況 (東から) (下) 完掘後 (東から)
- 図版 5 遺 物 (上) 発掘調査出土遺物 (下) 試掘調査出土遺物
- 図版 6 調査位置図 (1/25000)
- 図版 7 Aトレンチ平面図
- 図版 8 Bトレンチ平面図
- 図版 9 遺 物
- 図版10 調査断面図
- 図版11 調査位置図 (1/2500)

## 挿 図 目 次

- 挿図 1 昭和59年度試掘調査位置図
- 挿図 2 昭和59年度試掘調査出土遺物
- 挿図 3 昭和57年度試掘調査出土遺物

## 第1章 遺跡の位置と環境

大江湖底遺跡は、琵琶湖が京都・大阪へ注ぐ瀬田川となる直前にあり、現在の県立琵琶湖漕艇場の湖底に位置する。

後背地はゴルフ場や水田となっているが、ゴルフ場は近年埋め立てられた地帯である。以前は湖水が現在の大萱の集落地帯まで及び、低湿地の草原となっていた様子は「大江」や「大萱」などの地名からも察せられる。現在の国道1号線の南東域には帯状に延びる瀬田丘陵があり、東海道線に平行するように湖岸段丘が見られ、集落が発達している。この低湿地帯は、南湖東岸の入江的存在であったものが、瀬田丘陵から流れ出す小河川によって徐々に堆積し、水田として利用され、本格的に埋め立てられて現在の姿になったものである。

現在の大萱の集落の西端は、琵琶湖に平行して延びる通称「浜街道」に沿って発達しているが、大萱五丁目の浜口地区は琵琶湖に向かって帯状に集落が発展している。これは草津市の北山田や志那の集落が港を中心に帯状に内陸部に発達している様子によく似ている。浜口地区は、古くは「萱野の浜」と呼ばれ、近江国府の上納米の積み上げや、江戸時代には膳所藩への米の積み出し港として栄えたとする記念碑がある。古代から、大萱の湖岸地域の集落は琵琶湖の水運を利用していたことが推察できる。

また、大萱の善念寺には明治29年の大洪水の増水位記録が石垣に刻まれている。江戸時代から明治にかけて、琵琶湖の増水による被害は湖西や湖北にまで及んでいる。江戸幕府は瀬田川の供御瀬が秘密の徒渉地であり、膳所城や彦根城の防衛のため、住民の瀬田川浚渫要求を拒んできた。そのため、明治37年の旧洗堰の完成まで、湖岸周辺の人々には水との闘いがあったことだろう。

大江湖底遺跡の西の湖底には、全国唯一の湖底貝塚である粟津湖底遺跡が存在する。昭和27年、漁師の魚網にたまたま縄文式土器がかかったことから、京都大学の藤岡謙二郎氏によって調査が行われ、その後数回の確認調査で、ここが縄文時代前期と中期を中心とする貝塚であることがわかり、水面下3～4mに貝層が数層確認された<sup>(註1)</sup>。粟津貝塚の存在は琵琶湖の水位変化を考える上できわめて貴重な遺跡である。

瀬田川を下ると右岸に石山貝塚と蟹谷貝塚が形成され、左岸には縄文時代の遺跡は見当たらない。

石山貝塚は石山寺の門前にあり、縄文時代早期の代表的貝塚である。標高87.50mに立地し、貝層の堆積は約2mで、最下層の黒土層が旧川床と推論<sup>註1)</sup>された。そのため、近年発掘された多くの湖底遺跡が、現在の水位から2～4m低い<sup>註2)</sup>ため、石山貝塚との関係が問題視されている。

蛭谷貝塚は石山貝塚の北西900mにあり、縄文時代前期初頭の時期で、貝塚も小規模で、ごく短期間存在したと考えられている。昭和59年度の蛭谷貝塚北東の瀬田川川底の発掘調査では、縄文時代早期の押型文土器の包含層と、早期末から前期の包含層が検出されていることから、貝塚の広がりも予想される。<sup>註3)</sup>

そのほか、膳所湖底遺跡や唐橋遺跡などの湖底や川底で弥生時代の石剣が出土<sup>註4)</sup>しているが、最近の湖岸や湖底での遺跡発見から考えると、単純に上流からの流入物と判断することはできない。

## 第2章 調査にいたる経過

大江湖底遺跡は、湖底に須恵器や土師器などの土器片や瓦が散布することから、その存在が知られていた。

琵琶湖総合開発に伴う琵琶湖漕艇場浚渫工事の事前調査が、昭和57年度、59年度の2回に渡り、いずれも専門ダイバーによる潜水調査が行われた。

昭和57年度の試掘調査では、漕艇場部分を中心に行った。出土遺物は漕艇場の南北中央部付近で中世・近世の遺物と、その下層より縄文式土器が発見され、他の地点からも縄文式土器や土師器が発見されている。

その結果、栗津貝塚とは別に縄文時代の遺構が存在する可能性を示唆<sup>註5)</sup>した。59年度の試掘調査は、漕艇場の北側地域で行っている。

基本層位は約1mの厚いヘドロ層の下に約10cmの黒褐色の砂層が81.30m前後に位置し、挿図2の縄文式土器が包含されていた。最下層の泥炭層からは土器や貝層などの遺構や遺物は出土していない。

註1) 文化庁『遺跡確認法の調査研究——水中遺跡の調査』、丸山竜平「栗津遺跡発掘調査」『びわ湖と文化財』

註2) 平安高校考古学クラブ『石山貝塚概説』



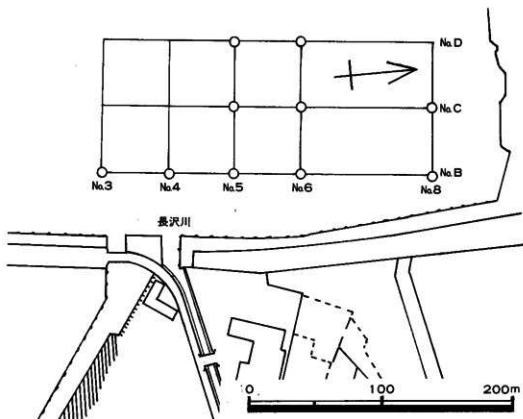


図1 昭和59年度試掘調査位置図

註3) 濱 修「壺谷遺跡」『滋賀文化財だより』No.102 (財)滋賀県文化財保護協会

註4) 滋賀県教育委員会昭和55年度「滋賀県遺跡目録」

註5) 丸山竜平「大江遺跡発掘調査」『びわ湖と文化財』水資源開発公団

### 第3章 調査の内容

調査の図版11のAトレンチ・Bトレンチの2ヵ所について、10×20mの鋼矢板で締め切り、排水の後調査を行った。期間は昭和60年12月4日から12月27日までである。

#### (1) Aトレンチ (図版7)

Aトレンチは漕艇場のほぼ中央部分で、湖岸から沖へ約150mの地点にあり、現場

への移動は小型交通船で行った。調査区は一重矢板のため漏水が激しく、6インチ・4インチポンプで終日排水を行い調査を続けた。湖底面はヘドロの堆積がなく砂礫層のため、人力と小型バックフォーで遺構検出を行い、ベルトコンベヤーで鋼矢板外の浚渫用台船に排土した。

層位は湖底面がほぼ水平で82.80mにあり、表層は30～40cmの鉄分を含む粗砂が堆積し、セタシジミや現代の陶磁器が含まれている。その下層は約1mの砂礫層で、所々ブロック状に粘質土が混入し、現代の陶磁器や瓦片が多数出土したため、攪乱層とみなした。瀬田漁港の漁師さんの話では、この周辺の深みに浚渫土が投棄されたり、旧洗堰のレンガ等も廃棄されたそうである。その攪乱層を排除すると暗青灰色の粘土層が攪乱を受けず残存していたが、出土遺物はなかった。次に81.30mで厚さ約10cmの暗黒褐色粗砂層がほぼ水平に堆積し、縄文式土器と石器が出土した。最下層は暗い赤褐色腐植土層（スクモ層）で、植物遺体が多く含まれていたが、遺物の出土はなかった。試掘調査では、これより下層から遺物が出土しなかったため、平面的な層位の確認は81.00m前後で終了した。泥炭層の一部を深掘りし層位の確認を行ったところ、この泥炭層は約80cmあり、徐々に還元色の暗青灰色の粘土層に変化していた。

## (2) Bトレンチ (図版8)

Bトレンチは長沢川の河口の北西部で、湖岸から約50m沖に位置する。昭和59年度試掘調査のNo.B-5地点(挿図1)である。この地域は近江大橋東詰一帯の張出しで入江状になっているため、ヘドロ層が約1m近く堆積していた。ヘドロ層は極めて軟弱なうえ、一重鋼矢板からの漏水が激しく、作業員の立ち入りも不可能なほど調査は困難であった。

そのため、表層のヘドロ層のみを浚渫用の大型バックフォーで排除した。また、矢板内の周囲に土留板を廻らし、漏水用の水路を確保し常時排水を行った。次にトレンチ内の2.5×14mの範囲を土留板で仕切り調査区として、残りの部分を排土置場とし、人力で遺構の検出を進めた。

基本層位は、湖底面が82.00mで、表層には60～70cmの黒褐色と暗青灰色の二層の泥土層（ヘドロ層）があり、81.40mで10cmの暗灰褐色粗砂層が堆積していた。次に、暗赤褐色腐植土層（スクモ層）が厚く堆積していた。いずれの層にも遺物の出土はな

かったが、暗灰褐色粗砂層は、Aトレンチで縄文式土器が出土した粗砂層とほぼ同じレベルであり、59年度試掘調査で縄文式土器が出土した砂層のレベルとも一致する。また、下層の泥炭層が無遺物である点も共通している。

これらの点から、大江湖底遺跡では縄文式土器を含む砂層が海拔81.30～81.40mにあり、その下層はスクモ層と呼ばれる泥炭層が堆積して、いずれも攪乱を受けずにいることがわかった。また、この腐植土層が形成された後に湖面の後退があり、人類が生活できる環境が作り出されたことがわかる。

## 第4章 出土遺物

### (1) 60年度発掘調査

Aトレンチの暗黒褐色粗砂層から縄文式土器2点と石器が1点出土した。

#### 1. 縄文式土器 (図版5・9)

J1は内・外面に荒い貝殻条痕で調整を施し、幅約1cmの粘土紐痕が認められる。器壁は5～6mmと薄く、胎土には荒い石英粒のほか、わずかに角閃石を含んでいる。外面左上には直径8mmの補修孔があり、外面全体に炭化物が付着する。J2は内・外面とも無文であり、胎土には角閃石が認められる。やや内彎し、内面には厚い炭化物が付着することから、底部に近い位置かと思われる。J1、J2とも縄文時代前期前半の条痕系深鉢片と思われる。

#### 2. 石器 (図版5・9)

S1は長さ4cm、最大幅1.2cm、中央部の厚さ0.4cmで、石材は頁岩と思われる。風化はあまり進んでいない。頭部に打痕がある縦長の剝片である。下面の両側面に二次加工が施されている。石錐の未製品かと思われる。

### (2) 59年度試掘調査の縄文式土器

挿図2の縄文式土器J3が出土している。出土位置は挿図1のNo5-Cポイントで、層位は泥炭層の上層の砂層である。大型深鉢の口縁部分で、外面には炭化物が付着し

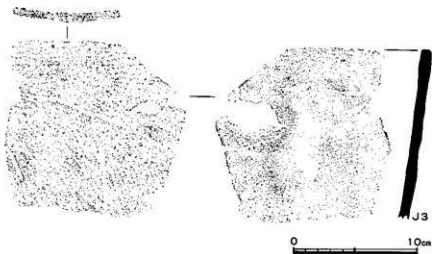


図2 昭和59年度試掘調査出土遺物

ている。口縁端部は平面をなす。外面は口縁部から下へ約4cmは横方向、その下は左から右の斜方向の条痕が施されている。内面は赤褐色でわずかに粘土紐痕が見られるが、条痕調整はなく平滑である。胎土は荒いが、わずかに角閃石を含んでいる。鳥浜<sup>註(1)</sup>貝塚出土の第4群土器は無文深鉢で口縁部上面に刻目を持ち、内外面に二枚貝条痕で調整している。網谷克彦氏はこの土器群を北白川下層式の羽島下層II式<sup>註(2)</sup>とし、縄文時代前期初頭に位置づけている。J3は器型からこの時期に併行すると思われる。

### (3) 57年度試掘調査の縄文式土器

挿図3のJ4からJ7が、57年度試掘調査のおもな縄文式土器である。J4はネガティブな押型文土器で、楕円の押型文を市松文に施文する。施文は3条3単位で、原体は直径約6mm、長さ約2.6cmである。器壁は約4mmと薄手で、胎土にはわずかながら角閃石を含んでいる。奈良県山添村の大川遺跡<sup>註(3)</sup>に出土例がある。J5は外面に斜行縄文を施し、内面は無文である。J6は外面に3条の沈線を持ち、磨消縄文が施されていたと思われるが、磨滅が著しく明確でない。中津式に併行する時期と思われる。J7は浅鉢の口縁部と思われる。

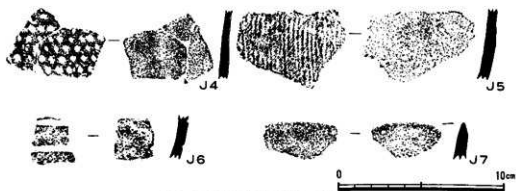


図3 昭和57年度試掘調査出土遺物

#### (4) ま と め

J4の押型文土器は器壁も薄手で、胎土も黒色系が強い。瀬田川の蜚谷遺跡や粟津貝塚の押型文土器を実見しても、角閃石を含む土器が多い。角閃石は生駒西麓の地層に見られ、土器分布の一指標となっている。

滋賀県内の押型文土器の出土地は、南湖周辺で石山貝塚、蜚谷遺跡、粟津貝塚、大江湖底遺跡、北大津遺跡、滋賀里遺跡、衣川遺跡、赤野井溝遺跡、湖西地方で鴨遺跡、弘川遺跡、湖北地方で磯山城遺跡、法勝寺遺跡、葛籠尾崎湖底、坂口遺跡、湖東地方で安土弁天島遺跡、油日遺跡の16遺跡を数える。遺跡分布で特徴的なことは、半数が南湖周辺の出土であり、湖底での出土が半数ある。葛籠尾崎湖底以外は石山、蜚谷、粟津、大江赤野井、磯山、安土ともに、現在の琵琶湖の水位から数m低位置の湖岸周辺である。近畿でもっとも古い押型文土器が出土する奈良県山添村の大川遺跡や、大阪府交野市の神宮寺遺跡が丘陵地や山麓に立地する所と比較すると、湖辺での出土が多い所は特別の意味がありそうだ。

押型文土器が遺構に伴って出土する例はごくわずかしかない。石山貝塚では最下層の黒土層の上面より高山寺式や山型の押型文土器が出土している。粟津貝塚でも神宮寺式や大川式に併行する押型文土器が出土している。蜚谷遺跡では蜚谷貝塚北東の瀬田川川底より縄文前期の包含層の下層から、神宮寺式・大川式が出土している。甲賀町の油日遺跡では丘陵の山林内に、デボ地と思われる土壌内から押型文土器が出土している。周辺には住居跡などは発見されていないが、奈良県の大川遺跡との文化的交流も予想される。

県内の押型文の施文の特徴は、ネガティブな施文、高山寺系のポジティブな楕円、山形の押型文と大きく三分類できる。時期的には神宮寺・大川式、樋沢式、高山寺式の三時期に大きく分類することもできる。施文法と時期差の関係は山形文を除外すると、ネガティブからポジティブへの移行である。

ネガティブな押型文は湖南地域の蜚谷遺跡、粟津貝塚、大江湖底遺跡、赤野井湾遺跡<sup>註6)</sup>に見られる。

蜚谷遺跡、粟津貝塚、大江湖底遺跡と瀬田川入口の2km内外の地域に、角閃石を含んだネガティブな押型文土器が出土することは、県下の縄文時代早期前半の文化成立にとって意味深い。角閃石が生駒西麓のみに出土するとなれば、県下の縄文時代早期のネガティブな押型文土器は、現在の淀川から宇治川、瀬田川に沿う文化的移動で、河内地方から近江にもたらされたことになる。押型文文化の成立は山形文の特徴から兵庫県神鍋遺跡との関連など湖西や湖東との関係も考えねばならない。

瀬田川入口周辺遺跡は県下の押型文土器の文化圏の一つを構成している。

註1) 福井県教育委員会「鳥浜貝塚」1979年

註2) 網谷克彦「北白川下層式土器」「縄文文化の研究」3

註3) 「大川遺跡」「奈良県遺跡調査概報」1979年度・1980年度

註4) 滋賀県立風土記の丘資料館「近江の縄文時代」1984年

註5) 京都新聞 昭和47年12月14日付

註6) 大沼芳幸「赤野井湾遺跡——消波堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」1986年

## 第5章 結 び

大江湖底遺跡東の段丘上の大萱二丁目に善念寺貝塚がある。最近、善念寺貝塚の成立について論争が交されているが、その論争は「善念寺貝塚が縄文時代のものか、江戸時代のものか」「縄文時代の貝塚であれば、海拔88m付近まで縄文時代の汀線の前進があったのか」といった内容のものである。

断面図によれば、貝層はごく薄く、地層の最下層より染付が出土している。

善念寺の石垣には、明治29年の大洪水で86.245mまで増水したと記された碑があるが、縄文時代にこれをそのまま適用することはできない。縄文時代の貝塚の多くは海岸付近に立地しており、内陸地の貝塚は中期の縄文の海進に伴うものである。縄文の

海進を湖に求めることは不可能ではないらしいが、この貝塚にそれが適用されるであろうか。また、必ずしも貝塚は湖岸や川岸に立地するとも限らないであろう。

今回の調査で82.30～82.40mの縄文式土器の包含層の下層には、約1mの腐植土層が認められた。この腐植土層はAトレンチ、Bトレンチとも認められ、大江遺跡全域に存在するものと思われる。また、対岸の粟津湖底遺跡においても、貝塚の包含層の下層は腐植土層となっている。<sup>註(2)</sup>これは粟津・大江湖底を含めた現在の近江大橋下流から、瀬田川入口までの広域にこの腐植土層が存在しているものと思われる。更に南湖東岸一帯にも堆積しているらしい。

大江湖底遺跡の腐植土層には木質が多数含まれており、その腐食度はかなり遅く、陸上部分の志那湖跡のものとはその様相が異なっている。また、腐植土層中には人間生活の痕跡をとどめるような獣骨やクルミ、貝塚層などは見られなかった。腐植土層は湖岸地域に広く分布し、琵琶湖形成の時期を考える上での一指標となっている。南湖東岸におけるこの腐植土層の分布範囲は湖岸から約1～1.5km沖合を中心に矢橋沖では約3km沖合まで堆積している。また、この腐植土層の堆積の時期を火山灰の分析から、低位段丘期（2～1万年前）に求めている。<sup>註(3)</sup>粟津貝塚の押型文や大江湖底のJ4の押型文が約8000年前の神宮寺・大川式と併行する時期であり、この腐植土層が2～1万年前に成立したことだけは十分考えられる。

しかし、湖岸一帯の腐植土層（スクモ層とよばれる層）の成立をすべて2～1万年前に求めることはできない。

志那湖底遺跡の南端の平湖付近の湖岸堤での試掘調査では、83.44mで厚さ約40cmの腐植土層が見られ、弥生時代のハシゴが含まれていた。その下層は約30cmの粘土層で、更に82.72mで縄文時代晩期の土器を含む砂層が検出されている。また、この試掘地点から沖へ約500mの湖底では、82.55mで厚さ20cmの泥炭層があり、その下の砂層を掘り込んで縄文時代晩期の土器三基が見つかった。更に下層は無遺物の砂層となっていた。

したがって、葉山川河口付近の志那湖底遺跡南部で見られる泥炭層は、いずれも縄文時代晩期以降に水位がわずかに上昇し堆積したものと思われ、スクモ層の下層にも遺構が存在することを示している。

また、粟津貝塚出土遺物で時期の下るものは船元Ⅱ式までであることから、中期前半

には粟津貝塚は廃絶したと考えられる。この廃絶の原因は湖面上昇によるものであろうが、この湖面上昇の原因が水位の増大か、地形変化によるものかは明確ではない。

石山貝塚は瀬田川右岸の段丘上に立地している。貝層表面は、「石山貝塚概説」によれば、標高87.5mで、貝層の下の黒土層は海拔85.5mであり、この黒土層が現在の川岸から西へ26.5mの地点にまで続き、そこを当時の川岸とした。そして早期末に急激な水位の低下を予想している。縄文時代早期末には、水位が現在の水位より約1m上昇していたことになり、粟津貝塚の遺物包含層である81~82mとの差は3~4m近くになる。こうした疑問に対し、地理学の面から縄文前期末~中期の隆起傾向の瀬田川の流路地帯について述べられている。<sup>註(4)</sup>

昭和59年度の蜚谷貝塚前の瀬田川調査では、蜚谷の谷間から傾斜して80.6~80.0mで縄文時代早期末から前期の包含層を検出し、更に50cm下層では縄文時代早期のネガティブな押型土器の包含層が検出されている。早期末から前期の土器群は、石山式から北白川下層Ⅱ式の土器が中心であり、この同時期では粟津貝塚の出土遺物がある。粟津貝塚では中期の船元Ⅰ・Ⅱ式の土器群もあるが、蜚谷遺跡では見られない。蜚谷遺跡の包含層の80.50m前後のレベルは、粟津貝塚の水面-3.67mと-3.94mで土器の包含層が検出されたものとほぼ同じレベルである。-3.67~-3.94mは蜚谷遺跡の早期末から前期の遺物包含層と矛盾しない。蜚谷遺跡では、縄文時代の水位の低下に伴う遺構の存在は確認されなかったが、粟津貝塚と同レベルでの遺物包含層が検出されたことは、瀬田川入口から石山地域にかけては当時は低水位だったと考えても無理はなかろう。

大江湖底遺跡の性格は縄文時代の前期には湖面が退化し陸化しており、南湖は現在の瀬田川のように河川となっていただろう。

註(1) 井関守夫・小笠原好彦「皇子山だより」No.34・35

註(2) 文化庁「遺跡確認法の調査研究——水中遺跡の調査」

註(3) 滋賀県教育委員会「瀬田川浚渫工事に伴う流域分布調査——瀬田川」1983 第1章、第5節

註(4) 註(3)と同じ



# 圖 版



調査地遠景(南東から)



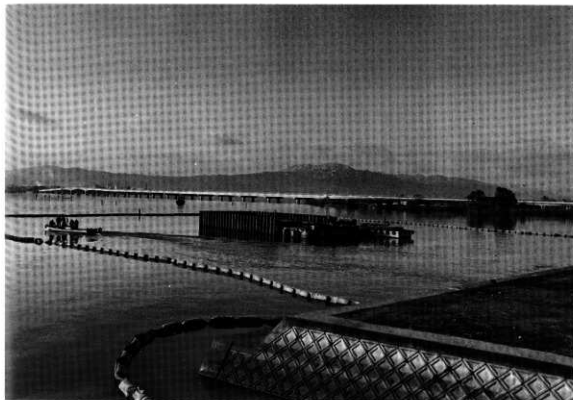
調査前近景(東から)



調査状況(東から)



完掘後(西から)



調査地遠景(南東から)



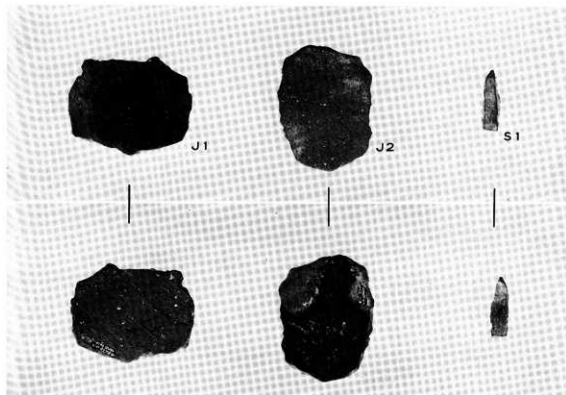
調査前近景(東から)



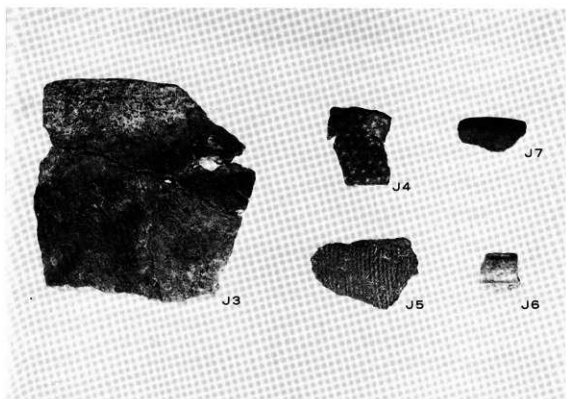
調査状況(東から)



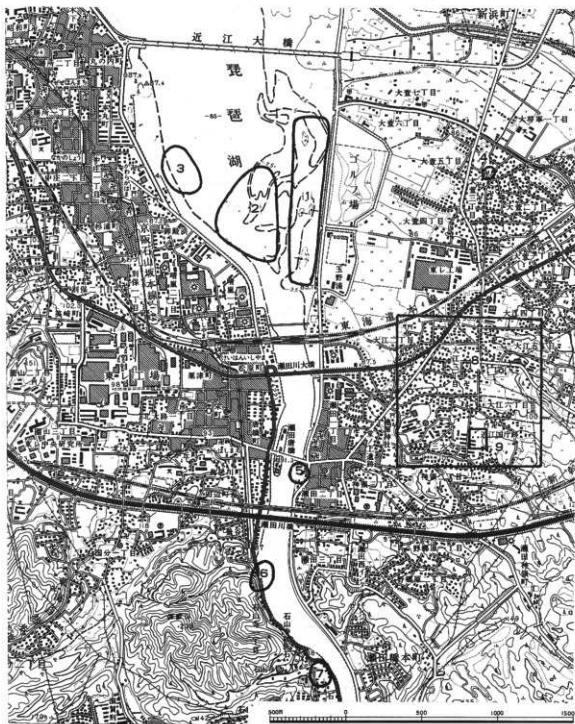
完掘後(東から)



発掘調査出土遺物

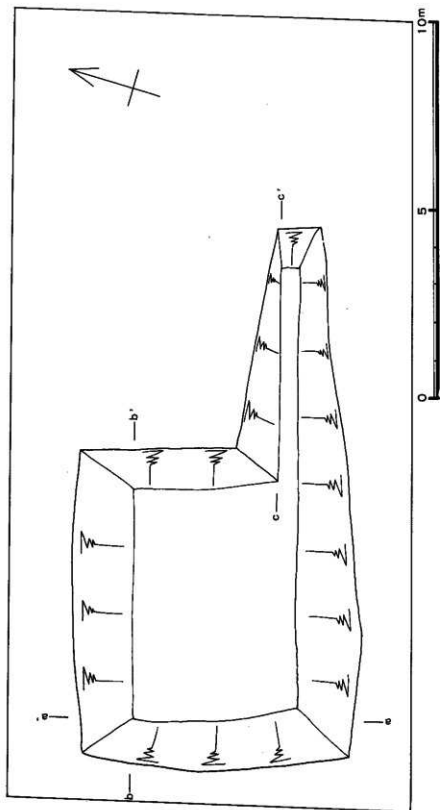


試掘調査出土遺物



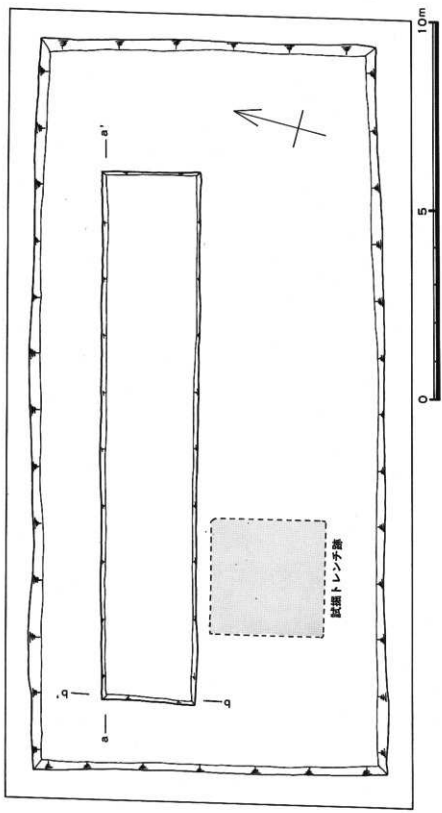
- |           |          |           |
|-----------|----------|-----------|
| 1. 大江湖底遺跡 | 4. 善念寺遺跡 | 7. 石山遺跡   |
| 2. 粟津湖底遺跡 | 5. 唐橋遺跡  | 8. 近江国術遺跡 |
| 3. 膳所湖底遺跡 | 6. 蟹谷遺跡  | 9. 近江国庁遺跡 |

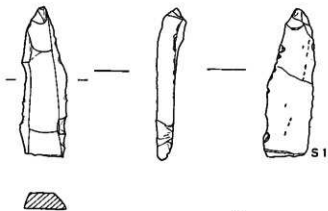
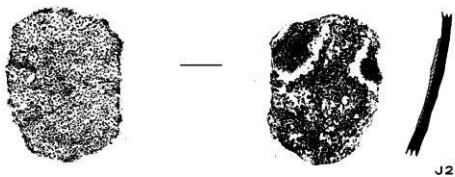
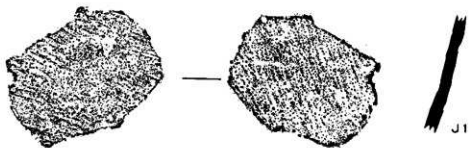
図版 7 Aトレンチ平面図



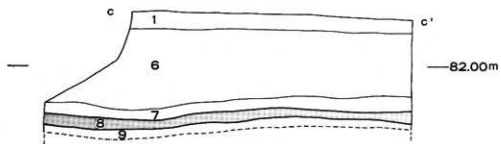
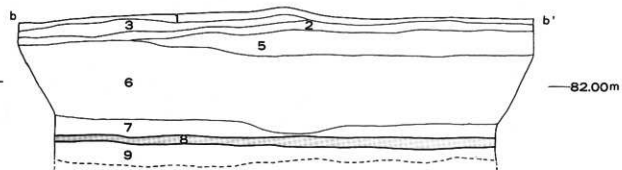
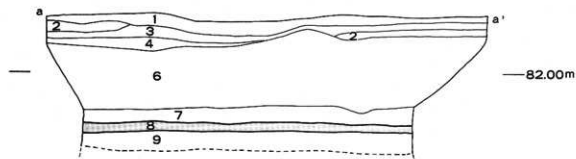


図版 8 Bトレンチ平面図



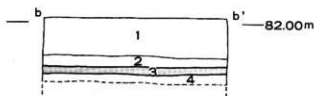
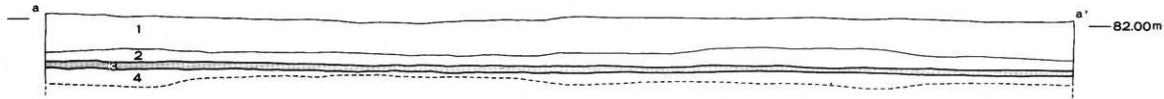


Aトレンチ



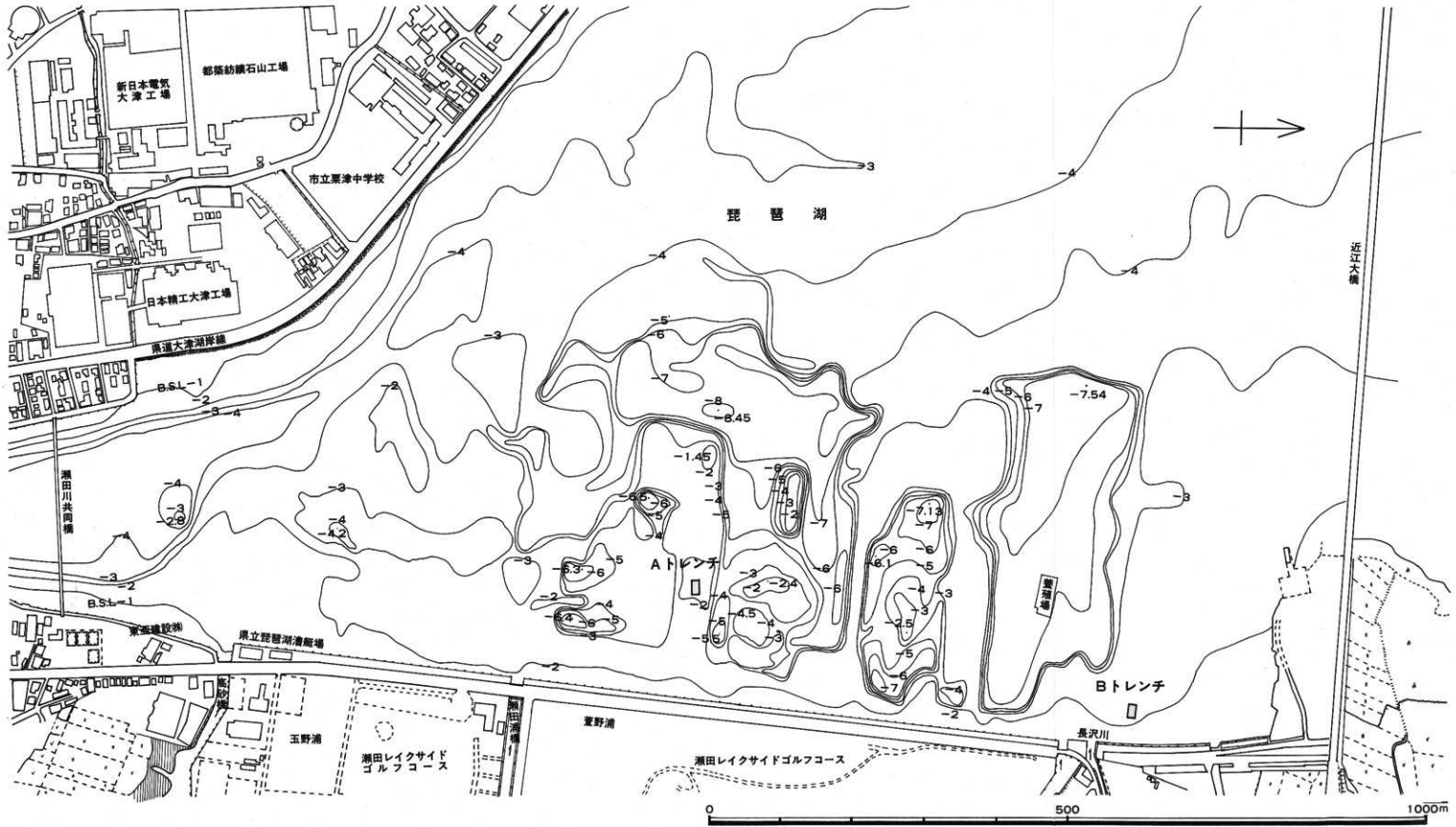
1. 赤褐色粗砂層
2. 黒褐色細砂層
3. 暗灰色粗砂層
4. 赤褐色砂泥層
5. 赤褐色砂礫層(シジミを含む)
6. 擾乱層(砂礫及び粘質土、現代陶器混入)
7. 暗青灰色粘土層
8. 黒褐色粗砂層(縄文式土器を含む)
9. 赤褐色腐植土層(スクモ層)

Bトレンチ



1. 黒褐色泥土層(ヘドロ)
2. 暗青灰色泥土層(ヘドロ)
3. 暗灰褐色粗砂層
4. 暗赤褐色腐植土層(スクモ層)





## 大江湖底遺跡発掘調査報告書

---

昭和61年3月

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9780

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3番18号

---